令和７年度自己点検評価（応用基礎レベル）

自己点検・評価の視点		自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点		
	プログラムの履修・修得状況	本学では、履修登録から講義の成績管理まで教務関連の管理については、入試教務システムであるCampus Planで行っている。このシステムを活用することで、受講生のプログラム履修状況を確認することが可能である。令和７年度では340名の学生が、本教育プログラムの科目を履修し始めており、その中でも242名の学生が、該当する配当年次の授業全ての単位を取得している。
	学修成果	応用基礎コアⅠ・Ⅱと選択項目については、講義科目で構成されていることから、その学修成果は課題や試験によって一定の評価が可能である。また、本教育プログラム受講者に対して実施している授業アンケートを分析することによって、学生の理解度を把握しており、その結果は次の項目に記載の通り。なお、令和７年度に開講された全MDASH科目（29科目）における全履修者（延べ1,716名）のうち、当該授業アンケートへ回答したのは延べ745名であった。
	学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	本教育プログラムの講義等受講者全員に対して実施した授業アンケートのうち、理解度の目安に関する設問「授業科目の内容は理解できましたか」では、83.2%の学生が「よく理解できた」または「ある程度理解できた」と回答していることから、全体として一定程度の理解は得られたと評価できる。
	学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	授業アンケート設問「授業科目に関連する分野について興味がわきましたか」では、「かなり興味がわいた」または「少し興味がわいた」と回答をした学生が全体の81.6%であった。昨年度の78.3%から上昇していることからも、本教育プログラムへの興味・関心については一定程度の好評を得たと考えられ、今後、後輩等への評判を通じた興味・関心の高まりも期待できる。
	全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	本教育プログラムは、当該学部の学生が、自身の所属するそれぞれの学科のカリキュラムの中から科目を履修できるようにすることで、学生の主体性を尊重し、専攻する分野に沿った学習ができるよう工夫している。また、令和７年度の各学科における履修率はそれぞれ以下の通りである。令和９年度以降の目標である履修率100%に向けて、様々な機会を活用した本教育プログラムの目的や社会的有用性についての周知をする。 ＜令和７年度履修率※＞ ※履修率＝延べ履修者数（科目ごとの履修者数合計）÷延べ学生数（プログラム修了のために単位修得が必要であり現に開講されている科目の数×学生数） 〇データサイエンス学科_96.3% 〇情報システム工学科_100.0% 〇知能ロボット工学科_95.2%

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	本教育プログラムは令和６年度より導入しているため、修了者の評価は令和10年度以降に可能となる。学生のキャリア形成を支援する富山県立大学キャリアセンターと連携し、本学の卒業生に係る進路状況を把握しているため、本教育プログラムの修了者が出た後は、進路等の把握・分析をすることができると考えている。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	県内企業が会員となり、産学連携を推進している「富山県立大学研究協力会」や、ＤＸ推進を目的とし県内企業等が会員となる「富山県立大学ＤＸ教育研究センターアソシエイト会員」制度を設けており、企業の意見を伺う機会が多くある。また、本教育プログラムの構成科目には、企業から講師を招いて行う企業との連携授業（データサイエンスリテラシー、キャリアアップ特別講義）も組み入れており、より実践的で効果的な内容となるよう工夫のうえ実施している。 データサイエンスリテラシーでは、公益財団法人環日本海環境協力センター(NPEC) に講義の 1 コマを担当頂き、衛星画像分析の講義・実習を実施。環境データの分析方法について学ぶ機会を設けた。 キャリアアップ特別講義では、富山県機電工業会と連携して県内企業の技術者による講義、工場見学、より少人数でのディスカッションを通して、受講生のキャリアデザインや社会的に求められている専門スキルの選択に関して情報を得る機会を提供する予定。
数理・データサイエンス・ＡＩを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	授業アンケート設問『授業科目に関連する分野について、自ら進んで調べる意欲や自主的に学習する意欲が高まりましたか。』については、「かなり高まった」、「ある程度高まった」と回答した学生が71.6％であり、昨年度の69.8％より増加していることから、「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させるという観点において、より効果を有する授業を実施できたと評価できる。来年度に向けては、この比率が更に高まるような改善を検討する。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること ※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載	授業アンケート設問『授業科目の内容は理解できましたか。』については、「あまり理解できなかった」、「ほとんど理解できなかった」と回答した学生が16.8％いたが、昨年度の21.9％より減少していることから、要因の分析とその分析結果を踏まえた、より「分かりやすい」授業となるような改善が効果的に行えていると評価できる。今後も更なる改善を検討する。